



みはま歴文だより

令和7年10月25日発行

◇編集・発行◇

美浜町歴史文化館

今年度の歴文講座始まりました!!

今年の夏は、猛暑日続きの非常に暑い夏になりましたが、この暑い中、遠くから(北は北海道、南は沖縄まで、国内にとどまらず、なんとカナダからも!)電車に乗り、駅から歩き、またレンタサイクルをこいで当館まで足を運んでくださる方がいらっしゃいました。本当にありがとうございます(^^)

また、今年度の歴文講座も7月31日の特別企画講座を皮切りに9月から12月まで月一回のペースで開講し、3月に最後、第5回講座を開講します。たくさんの方にお申し込みいただき、すでに定員に達している講座もあります。お申込み多数の場合は、椅子のみのお席で対応していきますので、興味のある講座がありましたら、ぜひお申し込みください。

みはま歴文講座

●特別企画講座「北前船オンラインセミナー2025」

7月31日に開講しました。小学5、6年生を対象にした北前船日本遺産推進協議会主催のセミナーには、全国各地の自治体や個人での参加もあり、多くの子どもたちとつながることができました。参加してくれた4名の子どもの中には、北前船についてクイズなどで楽しく学習することができたこと好評でした。

●第1回講座「嶺南方言の中の美浜町方言」を9月6日に開講し、金沢大学名誉教授の加藤和夫さんにご講演いただきました。とても身近な内容のため、地元の方のご参加も多く、嶺南だけでなく、嶺北、県外からの参加者も熱心に耳を傾けておられました。質問をされる方も多く、講座が終了した後も、質問待ちの列ができていました。

●第2回講座「三方郡と興道寺廃寺の成り立ち」は、10月4日、すっかりおなじみとなった福井大学の門井直哉さんを講師にお迎えし開講しました。久しぶりの興道寺廃寺がテーマとあって、常連の方から初めての方まで、たいへん多くの方にご受講いただきました。興道寺廃寺に興味のある方がたくさんいらっしゃることを改めて感じました。



第1回「嶺南方言の中の美浜町方言」
講師 加藤和夫さん



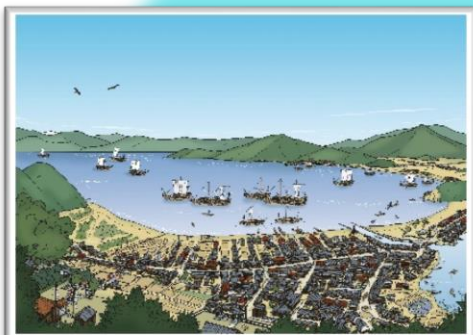
第2回「三方郡と興道寺廃寺の成り立ち」
講師 門井直哉さん



特別企画「北前船オンラインセミナー2025」
講師 高野宏康さん

北前船関連展示にNewFace!

現在、当館展示室では日本遺産北前船の構成文化財などを常設展示しています。新たに北前船船主の家に伝わる「幟旗」が加わりました。持ち主の方のご厚意で当館に寄託していただいたものです。布製のとても大きなものなので、折りたたんで展示ケースに入れてあります。展示期間は決めていませうが、素材の劣化など、長期の展示には不安があるため、お早めにご覧いただくことをお勧めします。



今年度前期の文化財保護委員会、歴史文化館運営委員会、興道寺廃寺整備検討会議を開催しました。
前回会議からこれまでの活動報告や、今年度の方針、活動計画などを報告し、各委員のみなさまからは、熱心な質問やご意見をいただきました。

文化財保護委員会では、10月末、若狭町熊川宿や滋賀県高島市にリニューアルオープンした中江藤樹・たかしまミュージアムに研修に行く予定です。



歴史文化館運営委員会

今回の興道寺廃寺整備検討会議では、国史跡興道寺廃寺跡の整備に向けて公有化が進められている中、現地視察も盛り込み有意義な意見交換ができました。

また、10月2日には興道寺区で地権者説明会を開催し、今後のスケジュール等の説明をさせていただきました。



興道寺廃寺整備検討会議現地視察



興道寺区地権者説明会

行事のお知らせ

■みはま歴史講座

【第3回】11月8日(土) 13:30~15:00

「震災転じ福をなした江戸時代の若狭の人々 ~1662年寛文地震における先人たちの地震対応~」

【第4回】12月7日(日) 13:30~15:00

「名づけの民俗とエピソード」

■文化財保護委員会研修旅行

10月30日(木)

熊川宿、中江藤樹・たかしまミュージアム

Youtube 配信中!

令和5年度みはま歴史講座

第4回講座「美浜に行き交う北前船」

第5回講座「紫式部の生涯と平安貴族の生活」

New

歴史文化館の SNS

QRコードを読みとって見てね!



◎お問い合わせ

美浜町歴史文化館

〒919-1138

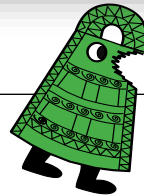
福井県三方郡美浜町河原市 8-8

TEL 0770(32)0027 FAX 0770(32)0615

E-mail bunkazai@town.fukui-mihama.lg.jp



文化財逍遙



恋の松原 (気山)

久々子湖南岸の梅街道沿いにぼつねんと佇む古跡、この地は平安時代中期から「恋(古美)の松原」と呼ばれていました。歌学書『八雲御抄』や謡曲『恋の松原』の舞台としてつとに知られ、悲恋の伝説がこの地の由来であると言われています。

…ある男女が密かにこの場所で会うことを約束したが当日は大雪になった。先着した女人は吹雪の中ひたすら男を待ち続けた。男が峠の雪を掻き分けたり着いた時女人はすでに息絶えていた…二人の逢瀬をはばんだこの峠を“うらみ坂”と呼んだという説も。

また、この地の「恋」は白鳥の古名「古比」の当て字とも言われており、葦辺にこだます哀愁をおびた白鳥の鳴き声とともに二人の悲恋が語り継がれてきたのかもしれない。



徒然雑記

「戦後80年に想う」

43歳で天逝した父は予科練の志願兵であった。終戦があと1年遅ければお前はこの世にいないと亡母はよく話していた。私と戦争との僅かな接点である。先般元助役の故高城茂氏の『大東亜戦争比島作戦参加記録』を拝読した。臨場感溢れる筆致と過酷で凄惨な体験に心が震えた。毅然とした上司の根幹にこんな地獄体験が刻まれていたとは。なぜか父の姿を重ねた。

しかし、現在も未だ戦禍は止まない。数多ある戦争の記録や記憶を嘲笑するかのように…。歴史の無力さと限界、人間の愚かさ、そして「**ファースト」の響きが不安を掻き立てる。